

敗戦三文オペラ

最終回

私の焼跡放浪記 窮民街に行き暮れて

“革命的窃盗団”の裏切り者を追って横浜へ来た筆者は、プータロー仲間と生活を共にしていたが……。

竹中 労

浅草・上野をふり出しに、敗戦直後の東京地図をたどり、横浜・大阪や神戸まで「私の焼跡放浪記」をつづける心算だったが、本誌編集部都合によりなぜか三回で打ち切り。

この稿、「山谷篇」としてすでに書き上げていたものを、急きょ最終回にあためてツジツマをあわせる破目とはなった。文章多少の前後、矛盾あつてもご免をこうむりますと、まずは断わって置く。それにいま一つ、私は単なるもの書きではなく、行動する人であるからして、この連載にあわせて浅草木馬館で「巷談の会」をひらき、十二階下の大正

時代から、エノケン・ターキーの昭和、「男娼の森」の敗戦までを語りつぎ、歌いつぐ催しを企画していたのである。

——何事であっても、熱っぽく思い入れてしまふのが、私のいつもの悪い癖。あつさり売文に徹すればよいのに、戦争も戦後も知らない、まして戦前は遠いまぼろしである一九七〇年代の若ものに、ニッポン窮民街の生成流転を、説き来り説き去ろうなんぞと余計な志をいだいたのが、そもその大間ちがい。「艶楽書館」にとつては場ちがいな、迷惑な試みであつたのだと、いまさら思い知つた

次第、こちらの事情で中断するのではないということだけを、せめて数少ない熱心な読者諸君は、了解していただき度い。

さて、街は餓えていた。上野の地下道から山谷のドヤ街へ——娼婦とドロボーたちの巢窟に、私は沈倫することになったのだが、それはかならずしも、「最暗黒の東京」ではなかった。前号でお約束した、オカマ・パンバン、ぐれん隊、海賊たちの世界について、それぞれの分野をくわしく語ることは、また別の機会に譲らう。――敗戦三文オペラの

皇國は、いささかこつた老風に敗戦弄人、窮民・流民の生きざまを、論をまじえて記述していく。

日本に政府はないのだ！

昭和二十年の晩秋、朝日新聞で読んだ石川達三の文章を、私は鮮烈に想いおこす。一字一句が正確ではないが、それはおおむね次のような、激烈な主張であった。「……いまや日本に政府はないのだ。すくなくとも我々の



生存を保証する政府はどこにも見当らない。
“政治” “法律” “治安” を信じて、窮巷に餓死する者は愚者である。経済的に無政府の状況にある今日、我々の命を守るのは我々の力だけだ。したがって我々は、一切の権力の外に我々自身の手で、共同防衛と相互扶助の“武装せる”生活擁護組合をつくらねばならない、ウンヌン」

記憶ちがいかも知れない。“武装せる”のくだりは、あるいは私が勝手につけくわえてしまったのか、とも思うのである。しかし、石川達三はまぎれもなく、“国家”を全否定していたのだ。無政府なるがゆえに、人々は自己防衛しなくてはならず、その“みずから守る”反国家・脱国家の「自由連合」こそ、（逆説的にいえば）無政府共産のユートピア国家を約束したのである。敗戦の焦土から、“真人民のくに”を創る唯一の道は、まさに一切の権力のラチ外に、人民自身の逆権力を共働し、連動するところにあつた。

革新諸党派が無何有と笑殺した、作家石川達三の提唱は、一九七七年の今日においても私の胸に、烙印のように置かれている。野坂

昭如との「二つの自由論争」、五木寛之らの批判によるペン・クラブの会長辞任と、保守反動の権化あつかいをされているこの人に、三十余年前このような発言があつた、ということをご記憶いただきたい。先達に対して、無条件に寛容であれ、というのではない。だがすくなくとも、『目白三平』の作者ズレに、石川を批判する資格などありはしない。夫子自身が小説家である以上、『蒼氓』『生きてゐる兵隊』に敬意を払うことはもちろん、『革新自由連合』から参議院議員に立候補しようというのなら尚更、石川達三の政治に対する一貫した視点（『金環蝕』の図式的なバースペクティブはさておいて）、反国家・脱国家の無政府主義に、謙虚に学ばねばならないのである。

——最終回である。故意に理屈っぽいのであります。何卒ご寛恕のほどを。いま一つの文章を紹介したい。こちらには資料がある。昭和二十三年二月二十五日「旬刊ニュース」37号、当時早大教授であつた戸川行男署名の『人殺し世相』。要約をするが、ほぼ全文を掲げて、そのころまともなものを考える人間

なら、どのような感想を国家に対して抱いていたかを、「焼跡を知らない」世代にかいま見てほしいと思う。

「血生臭い世の中である。強盗・殺人・毒殺等々、火葬場で焼いている死骸から黒焦げの赤ん坊とび出す。世の中は狂っている！ただの物盗りが何でもなしに人を殺す。ただついでに意味もなく人を殺す。これは最早、為政者とやらがいう『道徳の頹廢』、人心の紊れにとどまらない。どす黒い濁流が社会の底に、庶民の情念に渦まいている。やけ蕨のすて鉢の焦々した、どろどろした怒りとも、絶望とも形容のできない、ひっかきまわした感情がある。

……電車が動き出す、ドアはしまらない。悲鳴がおきる。子供が泣く。「助けて！」と誰か叫ぶ。吾々殺人電車の乗客たちは、何を聞こうと眉一つ動かさない。脇骨が曲るほど圧迫されながら、良心は眠っている。いや、肉体も昏睡しているのだ。私の町では警察に被害の届けがあると、半鐘が打ち鳴らされるきまりである。

本枯しの間に四点鐘を聞く。また何処かの家が強盗にやられたのだな、と夢うつつに思う。毎夜のことである。工場のサイレンぐらいにしか感じない。銀行の集団毒殺も（注Ⅱ帝銀事件）、面白いから新聞は見るが、これとて十人や二十人死んだから、生きたからといって心は驚かない。もらい子殺し（注Ⅲ寿産院事件）、ああ無惨だなと思う。しかし吾々の家でも子供たちは餓死の線上にあるのだ。

ドロボーでもやらねば 生きてゆけぬ

これは冗談ではない。私が真剣にいいたいのは、新聞も世間もみな犯人は、犯人はと自分をタナに上げているが、吾々自身ドロボーでもやらぬことには生きてゆけぬのではないか、ということなのである。大学から、私は俸給をもらっている。

戦争で家をなくし間借りしている。妻は病気で入院している。子供二人を寮に置いている。大学教授の俸給いくばくか、これは知らぬ人が多いだろう。しかし病院がいくら請求してくるか、周知のごとくである。不幸にして私は追剥ぎを働く腕力にめぐまれていない。闇屋をやる勇気を持たない。だがもしも思うとき私は、他者を「犯人」呼ばわりできない。

自分はせめても幸福だと、私は自分にいいきかせる。まる裸で帰った引揚者の身の上を想う、戦で親を夫を子をつた人々を想う、腕をとられ足をとられ俄盲の間に生きる傷夷軍人を想う。空襲の炎に顔を焼かれて二目と見られぬ姿となった少女を想う。

だが、その想像のそばから、数千万、数億円という金をもうけ、いやそんな大金でなく

ても腹を痛めてゐる連中が、チミチミと一松と腹裏に浮かび上つてくるのだ！

犯罪者よ、

巷に充ちあふれよ！

何某は国会議員で妾が七人もいる。誰某は土建ブローカーであり、役人に不浄の賄賂を散じて、幾十層倍する甘い汁を吸っている。耳に入ってくる噂だけでも、私の血は逆さに流れる。そしてこれらの風説はたいい事実なのである。

銀座通りのあの華やかさ、戦があつたなどまるで嘘のように、着飾つた男と女が行く。ダンスホールやキャバレーから、庶民の空腹をあざ笑うように、勝利に著つた国の音楽がひびく。喰いはぐれた復員軍人、失業者たち、ルンペンの青年が「畜生！」と叫び、「奴等」から強盗を働いたとしても、彼を極悪犯人と私には呼べない。断じてそう呼ぶことはできない。すでに白髪頭の私は、「厭世論」を書いて原稿料を稼ぐことだつて出来る。場合によっては今日死んでも悔いは多く

残らない。しかし、人生に光を見失つた青年たち、「畜生！」と怒鳴ることしかできない、彼ら若者の群れを思え！

不幸な同胞が山のようにいる。希望のない若者が巷にあふれている。はげしい忿懣と、せつない羨望とにさいなまれつつ、街をうろついている。その餓えた視線の先に、「新円階級」と称する油ざつた手合いが潤歩する、しかも人々は死に麻痺している。世相の心理分析やら、解説をまつまでもないのだ。何がおこつてくるか。

いやもう始まつているか、あまりにも明白ではないか！ 私は誇張しているのか、被害妄想に捉えられてゐるのか、それなら幸いである。またもし、警察権力の強制によつて、こうした事態が抑圧されるとする。為政者は好都合であつても、それは、国民全体の不幸である。そして血気の若者はかならずや反抗するであらう。

警官を何万人増やしても、きょうの犯罪に輪をかけた、血生臭い事件が明日、明後日と続発するにちがいない。正直に言えば、私はむしろ、そうなつてほしいと思う。毒を以て

毒を制さねばならない。ブローカーや「新円階級」、汚職役人や政治家と称する連中が、これは危いと着くなつて騒ぎ出す。そういう事態がこなくてはいけない。

本音を吐けば、私は犯罪を奨励したいのである。列車の集団強盗、銀行ギャング結構、盗賊よ野に充て、巷に充てといいたい。キャバレー、カフェーなど焼き払え、開屋を殺せ、不当に奪われたものを奪いかえせ！ と。これをようするに、おまわりさんに捕まらないギャング、不当利得に肥え太る合法的な（もしくは法の網を潜る）ギャングどもが、捕まるほうのギャングに恐れおののき、こわがり始めないことには、今の世の中おさまるまい、と私はいいたいのだ！

（『人殺しの世相』・戸川行男）

外食券を

盗んだ場合は

——戦争中、人の屍は数多く見た。「横濱大空襲」やグラマンの銃撃で、目の前で人が死んでいくところ、まさに累々たる焼死体を

見た。戦後も上野の地下道で、餓えて死んでいく人々を凝視した。

だが「人間が人間を直接殺す」のを、私は見たことがなかった。はじめて現場に出くわしたのは、山谷ドヤ街路上で、わが友・エンツおしげの配下が、おなじ男娼仲間との客の奪いあいから、刺身包丁で刺されたときであったが、彼は病院に運ばれる途中で死んだ。胸に包丁を突き立てられたままで、出血も多量ではなく、何やらあつけない最後だった。

山谷から高橋へ——、さらに松戸へと私が仮寝の宿を移していったのは、三笠書房版の『無頼と荊冠』にやや詳しく述べたように、ある目的のために資金を稼ぐべく、「革命的窃盗団」を結成して、もっぱら闇市荒らしを働らくようになってからであった。

とくに時効なので、「戦果」の一部を被露すれば、銀座某有名菓子店倉庫よりモンサント・サツカリンを十缶（当時の盗品価格で三万円）、上野石鹼横丁マーケット四軒（ただしすべて暴力団経営）から、密造シャボン約一万個、というのは、苛性ソーダと椰子油

を煮つめて石油缶に流しこんだ「原料」（これを四角に切つてスタンプを押すのである）を盗んで、別のマーケットに卸したので。

買手のほうも百も承知・二百も合点、しめて七十数缶を、一缶二百円ナリに値切られて、一万五千円の実収にしかならなかった。

いまだに残念至極なのは、かならず十萬食以上保管されている「旅行者外食券」を、東京都庁に忍びこんで盗み出そうという計画を、ついに実行に移せなかったことだ。

外食券の闇値は十五円、百枚単位の卸しで十円、全国を旅行しながら（東京はもちろん鬼門）、外食券食堂の前にセミを張っている（露店営業している）故買人たちに、小口に捌いていけば、当時の金で百万円を入手することができたのである。

一カ所で二、三百枚程度を散らせれば、あやしまれることはない。

仲間は私をリーダーに三人である。五千枚を一日がかりで処分するのは、たとえば大阪&神戸の二都市だけでも容易であった。わずかに十萬枚の粉失で、外食券を政府が刷りなおすはずもなく、全国指名手配などあり得な

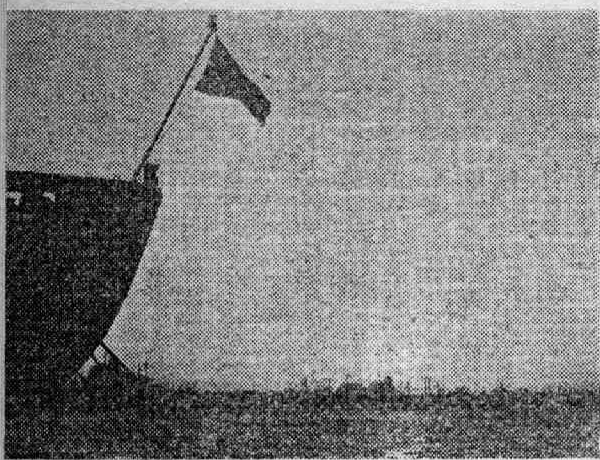
い。盗み出しさえすれば「完全犯罪」に成功すること疑いなしだった。

人呼んで、

プータロー（風太郎）

この作戦が画餅に終わったのは、故買容疑で私が逮捕され、某署の留置場に泊め置かれていた時、「同志」であるプロの窃盗師が風を喰らって（粒々辛苦たくわえていた資金まがかっぱらって）、遂電してしまつたからなのである。昭和二十三年の暮、素寒貧で警察を出てきた私は、ハマのドヤに潜伏していると、いう裏切者を追つて、横浜の桜木町駅に降り立ったが、わずかに三日で財布は底をつき、無情の木枯しに吹かれて阜頭の荷揚げ人足となった。人呼んでプータロー、俗説によれば風来坊の風太郎、実はしらみたかりの風太郎である。この社会の陰語で、ホワイ・チー、または観音様（千手観音）、手短かに申さば「プー」、いずれも風の異名とご納得願ひ度し。

——今日ではすっかり情景變つて、敗戦の



名残りは跡形もない桜木町、そのころは駅のホームから、港に停泊している汽船の煙突、帆船の三本マストが間近かに望めた。戦災をまぬがれた白亜のビルディングが立ち並び、駅前正面の丘には洋館がしうしやな贅をつらねて、そこは異国かと見まちがうミナト・ヨコハマであった。

だが、駅の構内は浮浪者だまり、敗戦乞食の群れがひしめいていた。左に弁天橋を渡れば本町通り、馬車道、元町となつかしい盛り場だが、進駐軍はメイン・ストリートをほと

んど接收して、伊勢佐木町通りなど、米軍のカマボコ兵舎と飛行場とはさまれた形で、まっ昼間から商店は大戸をおろして、猫の子一匹走らない「死の街」と化していたのである。

活気にあふれているのは、ここでも闇市と売春窟、駅前から野毛山へとこった返す、迷路のごとき小便横丁マーケット、進駐軍の残飯シチュウ、まぐろ(?)のあら煮やら、カストリ焼酎をあきなう、屋台店のカスパであった。

家なき人々はそこで空腹をみだし、夜は川筋の「水上簡易宿泊所」、だるま船をねぐらにしていたのだ。ボノチヨウ(曙町)私娼窟界わいを、持ち逃げ野郎を探し歩いて無一文となった私は、トトチャブ(すなわち水腹)のふらつく足をふみしめて、進駐軍の荷揚げをつとめた。

ここも奈落の「出会いの仁義」、プータロ―仲間の定宿・だるま船で仮寝の夢をむすんだ。人殺しの地獄図絵を、遂一この眼で見たのは六日目の深夜、しかも惨劇は、予告篇つきであった。

「海賊都市」ヨコハマ

盗ッ人稼業のアブク銭で、ドヤ街の個室を根城にしていた「高級浮浪人」の私には、蜜、虱、南京虫の連合軍襲来するだるま船の二段ベッド、すえた体臭とDDTの粉塵とが立ちこめる水上仮泊所は、まさしく拷問台と思えた。その地獄に身を沈めるのではなく、何とかしてまとまった金を手に入れ、配下の三人もしたがえて、「革命的窃盗団」を再建しなくてはと焦ったのは、この世界の泥水をとらふく吞んで、身も心も悪しき上昇志向に侵されていたからであった。文字通りのルンプロ根性、それはけっして無気力ではなく、意性でもなかった。

むしろ、人は勤勉に、ダ落するのである。闇市荒しを経営するうちに、「仲間」を利用すること、ボスとして彼らの上に立つこと。いうならばおのれの「党」を領導して、組織的に金品を収奪することに、私は熱中しはじめていた。盗ッ人風情が何を大仰なというなかれ、もしもこのビジネスを一筋に貫徹してい

たならば、私は田中角栄になっていたのだ。すくなくとも泥棒成金が、新興やくざの親分になり上って、金バッジをつけていたにちがいない。

閑話休題——。ハマに流れてきて、直ちに犯罪のニオイを私は嗅いだ。曙町の私娼窟で豪遊している船員ふうの三國人たち、南京町（中華街）の呆れかえるほど豊かな闇物資、デンスケ・モミ賭博の若い衆が煙草に詰めて吸っている白い粉、「開店休業」とうわべは見せかけて、実は裏口で禁制品（ライター、石、装飾品など）を売っている商店街、一杯七十円なりの純コーヒー、ヨコハマの闇の繁栄は、「密輸」に支えられていること一目りよう然であつた。

砂糖・バター・紅茶・肉類から、高級洋服生地・貴金屬、薬品、カメラ、ウィスキー、カレー粉にいたるまで、この街で手に入らぬものはなかった。それらの物資は、沖あい取引きされ、小舟で暮夜ひそかに川筋から、あるいは三浦半島あたりの漁港に、三々五々陸揚げされてブローカーの手に散っていく。そいつを横合いから略取する、ぬれ手に粟

の水上愚連隊、もっと手とり早く船を襲つて強盗をはたらく海賊共も跳梁して、ギャング映画そのけのミナト・ヨコハマであつた。ブローラーといえどもである、沖仲仕のぬ

きとりは当然、進駐軍の倉庫荒しは朝メシ前、トラックの上乗りとしめしあわせて、積荷をほり出し掠奪する。税関の監視船との追っかけっこで、海に沈めた物資を底曳きする、「ガンガラビキ」という珍商売も、けっこう余録になっていた。「ヨコハマ敗戦水滸伝」一席で、面白おかしくうかがえばそれだけで本連載の一回分になるが、先を急がねばなるまい。

だるま船の住人となつたその第一夜。「革命的窃盗団」再建のきっかけは、むこうからやってきたのだ。

カイデエモノシナ

隣のベッドから、「ニイさん、仕事師じゃないのかい？」と声をかけてきたのは、四十がらみの復員服であつた。あいまいに笑つてみせると、「いやね、身なりがバテていない

もんだからさ、ひよつとすると札持ち（指名手配の逃亡犯人）じゃねえかと、当て推量をしたつてわけ。

ゴジヤミには手におえねえ、カイデエモノシナを抱えているもんで、もしそっちがよけりや、カチセンぐらいの仲間になる。乗つてくれねえか」と、符諜まじりの啖呵になつた。ゴジヤミとは雑魚のことで、つまりチンピラ浮浪児、カイデエモノシナは「でっかい品物（盗品）」である。窮民街の数字の符諜は「一、二、三、四、カチセンすなわち三千万、語呂あわせめくが私は一も二もなく、復員服の口車に乗った。「じゃ、話をつけてくるから」と、翌朝消えたつきり、トンをかました（嘘をついた）のに相違あるまいと、気にもしなくなった四日目にふらりとあらわれて、「ちよつとばかり危いことになつたが、かまわねえかい？」

モノシナはサツカリで、三十ポンドあるという。時価にしてポンド一万円。故買人の引取り値段でも三千万、復員服はそれを泥棒市場の正規な（？）ルートではなく、半額の五千万で南京町の中国人にじかに流す交渉を

してきたというのだ。「マブネタ(まともな盗品!)」じゃないんだな、どこからパクってきた」と聞くと、果せるかな岸壁にロープで泳がせてあったのを猫ババしてきた、つまり密輸団か海賊か知らぬが、「本職」の上前をはねたのであると白状に及んだ。

復員服の片棒をかつぐことを、私は言下に断わった。三十ポンドといえは、かなりの量である、サツカリンは私も扱ったが、まとめて買う相手は限定される。上前をはねられて「本職」が黙っているわけがない。南京町に回状がまわっていたら飛んで火に入る夏のムシである。「殺されるよオッサン」と私は注意したのだが一言多かったのだ。何処かに隠しておいて、一ポンドぐらいつつ小出しにばらしていくんだな、と。

噫! 「少年密輸団」

殺されたのは復員服ではなかった。密輸のブローカーたちは、コジヤミル浮浪児たちを兵隊に使って物資を売りさばく。ザキ(伊勢佐木町)の小学校、窓はことごとく破れて、

ボロボロの残骸をさらす校舎は、夜となれば街頭の職場となり、浮浪児のねぐらとなる。密輸物資の取引はその裏門あたり、靴磨きの台をつくるふりをして、コジヤミたちが集合している。

そこへ闇屋の手先がやってきて、モノシナを分配するのである。十歳ぐらいのちびから、十七、八歳の青年まで、「破れ傘一家」「血桜団」などと、いっちようまえの徒党を組む、やくざ集団顔負けの「統制」に服して彼らの共同体をつくっているのだ。

もちろん大口の密輸ではなく、水上愚連隊の戦利品、「ガンガラヒキ」の海底拾得物等いうならば犯罪都市ヨコハマの余恵に、雑魚どもはあずかっている。復員服もまたケチな闇屋のサン下、港の小判鯨にすぎなかった。大物の額からこぼれ落ちた三十ポンドのサツカリンは、しよせん最初から彼自身に不釣り合いな餌だったのである。

私に教えられた通り、彼はその夜一ポンド缶をばらして、コジヤミたちに分配をした。熱柿くさい息を吐いて戻ってくると、二千元ほどのもうけになった。「気持ちだけで受け

とってくん」と百円札を三枚、義理の悪い男ではあったのだ。次の夜また一ポンド、と称していたが実は気が大きくなって、三缶もばらしてしまったのだ。バンバンに送られて帰ってきた。

へべれけに酔っぱらって、このままでは危険だと私は思った。「明日はもう行くな」と翌朝クギをさして置いて、代りに様子を見に行った。

ラバソールに肩の怒った背広、ソフト帽というおあつらえ、「本職」と一目でわかる、愚連隊の哥兄連がコジヤミを集めて、凄んでいる最中だった。「ほんとに、棲家が何処か知らねえんだよ」と、ちよつと小生意気に口をとがらした一人が腰り倒され、ゲソパン(足蹴り)が飛んだ。遠まきに見守っている闇屋の手先たちにまじって、無抵抗な少年にくわえられる暴力を、私は黙って見ていたのだ。はっと気がつく、復員服を送ってきたあの夜の天使が、すぐ横に立っていた。チラと私を見た眼は、あきらかに顔を覚えていた。しかし彼女は何もいわなかったのだ。

長い時間が経った。

ぐったり伸びてしまった少年の頭の上に、コンクリートの固まりを、背広の大男がさしあげて、「キサマラハトロボータ、シケイニシテヤル」といった。彼は本気で殺すつもりだったのか、いまでも私は疑っている。しかし兇器は撃ちおろされて、一人の少年が死んだ。まぎれもなく「人間が人間を直接殺す」のを私は見た。その体験は嘔吐をともなわず、不思議に平静であった。少年は泥と血に塗れ、男たちの背広は汚れていなかった。

殺人者は去っていた。少年たちは最後まで闘わなかった。声を上げて哭くものもなく、それはこれまでも同じ運命が、彼らの上に幾度も襲ったかのような情景だった。そう、コジヤミたちは、復員服のねぐらが何処かを知っていたのである。

だるま船のまわりで、たしかに見かけた貌があった。しかし彼らは黙告をした。「仲間」を売らなかつたのだ。いまになってそう思い当る。そのときの私は別の感情を抱いた。なぜ闘わないのか腑甲斐ないと、おのれの傍観者である立場をかえりみず、浮浪児たちを軽

べつした。人の生命が眼の前で奪われたのに平静でいられたのは、きつと彼らを人間以下のものと見る、差別の惨心があったからなのだ。

窮民の街に架けた革命のまぼろしは、私を去っていった。石川達三の「武装せる」生活擁護組合、戸川行男の「犯罪者よ地に充て」というバラドックスも、ついに願望の位相に消えたごとく、敗戦の上野も浅草も横浜も、サン・タントワヌではなかった。

私はただ夢を見たのか、「窮民革命」とはこれをようするに、錯乱のキツチュでしかなかったのであろうか？ いや、そうではないのだ。あの焼土に生きる真人民の姿を、私はけつきよく見ることができなかったのである。

つまりは革命ごっこ、犯罪ごっこの過客としてしか、ニッポン窮民街を漂泊しなかったのだ。坂口安吾の思想を、「まっさかさまに墮落する」ことを、私は実践しているつもりでその実、探険する者でしかなかった。敗戦を生活しなかつた。帰るべき学園もあれば故郷もある、仮装浮浪人にすぎなかつたのだ、これもまたいま思うことである。性コリもな

くさらなる奈落へ、ダンテ気取りで私は降りていった。「ここをすぎて地獄の門」。革命はともあれ墮落は、もはや変改のきかぬわが青春の根本命題であったから――

昭和二十四年初冬、林芙美子「放浪記」に出てくる、新宿旭町の本質ホテル。敗戦後は「厚生館」と名をあらため、天幕ぼりの簡易宿泊所に、二枚十円なりのボロボロとんくるまり、河岸のまぐろのようにお隣さんと枕を並べてまどろむ、ほんもののルンペンの明け暮れに、私は落ちていった。そして、上野にまたぞろ舞い戻り、ガード下の拾い屋稼業。前身で紹介した妻夫婦の世話で、ヤキトリの屋台曳きと、放浪はまだまだ終らぬのだが、紙数がここで尽きた。いづれまた、どこかでお目にプラさがすることも早々にあいさつじまいして、「最終回」のペンを擱く。

本文中にもありますように、編集部の誠に勝手な都合により、今回の連載を三回で完結させていただきました。竹中氏及び愛読者の皆様に深くお詫び申し上げます。（編集部）